

sendmailに関する解説

sendmail はメッセージを一人または複数の受け手 (recipient) に送ります。必要ならばインターネットワークを通してメッセージを正しい場所に転送します。

sendmail はユーザインタフェースとして使われることは考慮されていません。ユーザにとって使いやすいフロントエンドは別のプログラムで提供されます。 sendmail は、あらかじめメールとして整形されたメッセージを配送するためだけに使われます。

引数を指定せずに起動すると、 sendmail は標準入力をファイルの終端まで、または `.` だけを含む行まで読み込み、そこで確認したメッセージのコピーを、列挙されたアドレスに送ります。アドレスの文法や内容にもとづいて経路に使用するネットワークを決定します。

ローカルアドレスは、あるファイルの中を検索して適当なエイリアスを行います。先頭にバックスラッシュ `¥' のついたアドレスについては、エイリアスは行なわれません。 8.10 から、送り手はエイリアス展開の対象に含まれるようになりました。つまり、 `john' が `group' にメールを送る際に、 `john' が `group' に含まれているならば、送ったメッセージは `john' にも送られます。

パラメータ	
-B type	ボディのタイプを type に設定します。現在有効なのは、 7BIT か 8BITMIME です。
-ba	ARPANET モードに移行します。すべての入力行は CR-LF で終わらなければならず、すべてのメッセージの末尾には CR-LF がつきます。また、 ``From:" と ``Sender:" フィールドは送り手の名前としてチェックされます。
-bd	デーモンモードで実行します。Berkley IPC が必要です。 sendmail は fork を行い、バックグラウンドで動作し、ソケット番号 25 で SMTP コネクションを待ちます。通常このモードは、 /etc/rc から実行されています。
-bD	フォアグラウンドで動作する以外は -bd と同じです。
-bh	継続的なホスト状況データベースの現在の値を表示します。
-bH	継続的なホスト状況データベースから期限切れのエントリを抹消します。
-bi	エイリアスデータベースを初期化します。
-bm	普通にメールを配送します(デフォルト)。
-bp	メールキューのリストを表示します。
-bs	標準入出力で RFC821 にもとづいた SMTP プロトコルを使います。このフラグは、 -ba フラグのうち SMTP 互換の全ての操作を含みます。
-bt	アドレスのテストモードで起動します。このモードは対話モードでアドレスを入力し、処理の過程を表示します。設定ファイルをデバッグするのに使います。
-bv	名前のチェックだけを行います。メッセージの収集や配送は行いません。ベリファイモードは、ユーザやメーリングリストが有効かどうかを確認するために使います。
-C file	別の設定ファイルを使います。 sendmail は、別の設定ファイルを使用する場合は root として実行することはできません。
-d X	デバッグ値を X に設定します。
-F fullname	送り手のフルネームを設定します。
-f name	``from" に入る名前(つまり、エンベロープ中の送り手 (envelope sender) の名前です)を設定します。最初の送信依頼の間に From: ヘッダが失われている場合、このアドレスは From: ヘッダの中でも用いられる場合があります。エンベロープ中の送り手アドレスは、メッセージ伝送状態の通知の受け手として用いられ、また、Return-Path: ヘッダにも現れます。 -f は、 ``trusted" なユーザ(普通は root , daemon , network です)が使うか、送り手が自分自身の名前を指定して使う場合のみ指定することができます。それ以外の場合、X-Authentication-Warning ヘッダがメッセージに付加されます。
-G	メッセージのリレー (ゲートウェイ) 送信。例えば、 rmail が sendmail を呼ぶときがそうです。
-h N	ホップカウントを N に設定します。ホップカウントは、メールが処理されるたびに増えていきます。ホップカウントが上限に達したとき、メールは「エイリアスがループしている」という旨のエラーメッセージといっしょに送り返されます。もしこのフラグが指定されなければ、メッセージのなかの ``Received:" 行がカウントされます。

-i	入力されるメッセージ中の `.` だけを含む行を無視します。このフラグは、データをファイルから読み込むような場合に使用する必要があります。
-L tag	syslog メッセージ中で使われる識別子を、指定した tag に設定します。
-N dsn	配送状況の通知条件を dsn に設定します。 dsn には、`never` (何も通知しない) または、コマンドで区切った、`failure` (配送が失敗した場合に通知する) `delay` (配送が遅れた場合に通知する) `success` (配送が正常に行われた場合に通知する) の組み合わせを指定する事ができます。
-n	エイリアスを行いません。
-O option =value	オプション option を、指定した value に設定します。この形式では長いオプション名が使用されます。詳しくは後に記述します。
-o x value	オプション x を、指定した value に設定します。この形式では、一文字のオプション名しか使用できません。短いオプション名についてはこのマニュアルには記述されていません。詳しくは、" Sendmail Installation and Operation Guide " を参照して下さい。
-p protocol	メッセージを受け取るために利用するプロトコル名を設定します。設定できるのは、`UUCP` のようなプロトコル名だけかプロトコル+ホスト名、たとえば `UUCP:ucbvax` などです。
-q [time]	キューのなかにあるメッセージを処理する間隔を設定します。 time を省略した場合は、キューの内容を一度だけしか処理しません。 time は、`s` (秒)、`m` (分)、`h` (時間)、`d` (日)、`w` (週)の単位を付けた数字で指定します。たとえば、`-q1h30m` や `-q90m` は、タイムアウトを 1 時間 30 分に設定します。 time が指定されると、 sendmail はデーモンとしてバックグラウンドで実行されます。このオプションは、問題なく -bd と共に指定可能です。
-qI substr	キュー ID の文字列に substr が含まれるジョブのみを処理します。
-qR substr	受け手のリストの文字列に substr が含まれるジョブのみを処理します。
-qS substr	送り手の文字列に substr が含まれるジョブのみを処理します。
-R return	メッセージがバウンスした時に返送されるメッセージの量を設定します。 return パラメータには、メッセージ全体を返送する場合は `full` を、ヘッダのみを返送する場合は `hdrs` を指定します。
-r name	-f フラグと同じですが、古い形式です。
-t	受け手をメッセージから読み取ります。To:, Cc:, Bcc: フィールドが受け手のアドレスとして読み込まれます。Bcc: フィールドはメッセージの転送前に削除されます。
-U	最初の(ユーザからの)発送である事を示します。このフラグは、 Mail や exmh のようなユーザエージェントから呼び出す場合は 必ず 指定する必要があります、 rmail などのネットワーク配送エージェントから呼び出す場合は、 絶対に 指定してはいけません。
-V envid	オリジナルのエンベロープ ID を設定します。これは、DSN をサポートするサーバ間では SMTP 上を伝達し、DSN に従ったエラーメッセージの中で返送されます。
-v	詳細モードに移行します。エイリアスの展開などが報告されます。
-X logfile	指定された logfile に、メーラに出入りする情報すべてを記録します。メーラをデバッグする際の最後の手段としてのみ使ってください。非常に大量の情報があったという間に記録されます。
--	コマンドフラグ処理を停止し、残りの引数をアドレスとして使用します。